東洋大学　国際学部国際地域学科

訪問調査対象プログラム名	海外英語実習
類　　型	語学習得型・共同 PBL 型×必修型

Ａ．海外プログラムの詳細

【要旨】

- 国際学部国際地域学科の 1 年次第 3 クォーターまたは第 4 クォーターで必修の、5 週間にわたる英語習得のためのプログラムである。
- 行先はフィリピン、マレーシア、オーストラリアに分かれ、英語の授業を受けるとともに PBL などのグループワークに取り組む。このうち、オーストラリアは上級レベルの語学習得に重点が置かれている。
- 1 クォーター全期間にわたるプログラムである。派遣前に他の授業科目の履修がないため、全 5 日間にわたる事前学習を組み込むことができている。

１．教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

全学、学部あるいは学科での DP あるいは教育目標との対応関係が明確である

同学科はグローバル人材の育成を目的としている。本プログラムの目的は「入学から早い段階で基礎的な英語能力、コミュニケーション能力を身につけ、4 年間の学修の基礎を固める」と設定されている。目標は以下の通りである。

1. TOEFL-ITP スコア 25 点（IELTS0.5、TOEIC70 点）程度の英語力の向上
2. 異文化環境で臆することなくコミュニケーションを図れる能力を高める
3. 事後研修を通じてこのプログラムでの学びを次の海外活動にどのようにつなげて行くかを自ら考え、大学 4 年間での学修計画を 1 年次の時点で明確にする

２．海外プログラムの実施状況とその内容

教養や英語スキルの習得にかかわる主目的のプログラムに加え、現地の学生や人々のコミュニケーションにかかわるプログラムが明示されている

【実施時期】9 月～12 月（第 3 クォーター、第 4 クォーターのいずれか）

【実施期間】5 週間

【実施場所】フィリピン、マレーシア、オーストラリア

【参加学生数】約 180 名（留学生を除く学科 1 年生全員が対象。ただし、交換留学に参加することがほぼ確定している学生を除く。）

【プログラムの具体的活動内容】

3 地域、4 大学に分けて派遣される。このうち、ホームステイを伴うオーストラリアのカ

ーティン大学イングリッシュスクールへの派遣プログラムは、英語能力が比較的高いIELTS5.0 以上の学生を対象にしている。

いずれも、1 クォーター全期間を通じて行われる。学生は本クォーターにおいて他の授業科目を履修しないため、事前・事後学習がしっかりと組み込まれている。

・海外英語実習（フィリピン・マレーシア）

派遣先であるサンカルロス大学（フィリピン）、マラ工科大学（マレーシア）、およびマレーシア科学大学（マレーシア）では、東洋大学の本実習向けに専用のプログラムが用意されている。平日は午前 9 時から英語クラスが 90 分×50 回行われる。また派遣先大学では東洋大生 1～3 人に対して現地学生 1 人がバディとして割り当てられ、午後はバディとのチュートリアルが 90 分×20 回行われる。また、本実習への出発前にテーマを設定し、現地でそれに関するグループ調査を実施する。本実習の最終週にはグループで 20～30 分間のプレゼンテーションを行っている。

・海外英語実習（オーストラリア）

派遣先であるカーティン大学イングリッシュスクールに設けられた、カーティン大学に留学しようとする英語ネイティブでない学生向けの既存のプログラムに参加する。

英語 4 技能のそれぞれに特化した授業を午前 2 コマ、午後 2 コマ履修する。履修後はホームステイ先に戻る。

2018 年度は、PBL のテーマとしてオーストラリアの各州の調査がテーマとして与えられており、事前学習や派遣先でも、各地域に関する講義が行われた。しかし、カーティン大学があるパース市とテーマは直接関係がなく、学生はインターネットで調べること、特に帰国後に調べることに終始した。2019 年度ではオーストラリアの多様性を理解することを全体のテーマとし,「オーストラリアの自然環境の多様性」など 5 つのテーマ別にグループに分かれ, 事前学習で下調べとリサーチクエスチョンの設定をし, 現地でフィールドワークを行い, 帰国後プレゼンテーションを行うようにしている。またこのテーマ別フィールドワークでは、カーティン大学のヒューマニティ学部の教員の指導や現地学生も同行するなど協力関係が構築されている。

３．事前・事後学習およびカリキュラム全体との関連

全学・学部・学科のカリキュラムと連携している

現地での学修に関連する事前学習のコンテンツが用意されている

現地での学修に関連する事後学習のコンテンツが用意されている

1 年次の第 3 または第 4 クォーターに 5 週間の英語実習を海外で受講することで、その後の英語学習へのモチベーションや、海外活動へのモチベーションを高めることが意図されている。この実習参加の準備として、第 1 クォーターおよび第 2 クォーターにはコミュニケーション力を高める授業を設置している。

事前・事後学習は、本プログラムが 1 クォーター全期間にわたって実施され、他の授業科目を履修しないため、事前・事後学習各 5 日間と事後学習期間中に 12 分間のプレゼンテーションを実施することが可能になっている。

事前学習については 5 日間にわたって行われ、現地事情講義 1 コマ、グループワーク 6 コマ、課題発表 1 コマが含まれ、加えて個人面談やリスク管理などの講習が行われている（カーティン大学派遣の場合）。また、事前学習の中で学生に目標設定を行わせている。目標設定では、「毎日 10 単語を覚える」など、定量的目標を設定するように指導している。

事後学習では、グループプレゼンテーションを英語で 12 分間が含まれている。グループのメンバー全員が発表する場面を設定し、グループ活動にあたって懸念されるいわゆるフリーライダーが許されない仕組みを取っている。

４．効果測定・アセスメント、カリキュラムマネジメント

学科での DP や教育目標、あるいは海外プログラム個別の教育目標に対応させた形で、海外プログラムの成果を多面的に評価する仕組みがある

英語力については、本プログラムへの参加前後で IELTS テストが行われ、成果をアセスメントしている。

その他の異文化理解や異文化対応力については、留学の効果測定の分野でよく知られている Intercultural Development Inventory（IDI）を事前事後に受検し、成果分析も行っている（なお、IDI の規約により分析結果は公表できない）。

また、成績評価については、本プログラムは授業科目「海外英語実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」として開講されているため、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのそれぞれについて評価がなされる。「Ⅰ」と「Ⅱ」は海外での英語実習における小テストや授業態度、試験結果現地の指導教員が成績評価している。「Ⅲ」は事前・事後研修及び 5 週目の出席状況や事前研修のレポート、参加期間中のウイークリーレポートおよび、最終報告、現地や東洋大での発表帰国後のプレゼンテーションなどにより、東洋大の担当教員が成績を評価している。

カリキュラムマネジメントは、本プログラムの授業科目担当教員から成るタスクフォースが設置されており、必要に応じてプログラムを改善している。また毎年、実施マニュアルを改定している。フィリピン、マレーシアでは第 1 週と第 5 週に教員が参加学生を引率し、オーストラリアでは第 3 週に教員が渡航してプログラムの進捗状況を確認するとともに、参加学生との面談を行っている。

タスクフォースによってプログラム改善が行われた具体例としては、当初はコースを希望で選択できていたが、英語力に応じたレベル別配属に変更したということがある。これにより、特に PBL などのグループワークにおいて英語力が低い学生が英語力の高い学生に依存してしまう状況の改善につながった。

また先述したように、オーストラリア・カーティン大学派遣では、2018 年度の PBL がオーストラリアの各州を分担しての調査を実施した。しかし、学生が派遣先ではない州が多く

含まれ、帰国後に調査可能な内容での発表になってしまった。このため 2019 年度はフィールドワークを、「オーストラリアの自然環境の多様性」をはじめとする 5 つのサブテーマに分け，事前学習では各テーマについてグループワークで調査するものとした。

５．本プログラムに参加しやすくするためのサポートや工夫

必修のプログラムであることから、単位化されている。加えて、1 クォーターをまるまる使っている。そのため、他の授業科目を履修せずに事前・事後学習に十分な時間を充てることが可能となっている。資金的には、JASSO から受ける奨学金以外に、参加全学生に対して大学から 10 万円が支給（単位取得が条件）される。また、派遣先大学での学費は不要となっている。

６．本プログラム参加者の他の海外プログラムへの参加

国際学部に所属しているため長期留学の意向を持っている学生が多い。特に本プログラム参加学生のうち、おおよそ 1/3～1/2 は長期留学に行っている。

Ｂ．学生インタビュー

１．東洋大学学生１（国際学部国際地域学科２年）

（１）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

大学入学前までは、祖父が海外旅行が好きなくらいで自分自身は海外とは縁遠かった。ただ、アメリカの映画などを見ながら何となく外国に行ってみたいと思っていた。また英語についても取り立てて好きなわけではなかったが、将来の仕事のことなどを考えると英語を話せることは必須なのだから、勉強する必要はあるのだろうと思っていた。

大学に入学してからは、せっかく国際系の学部に入学したのだから、できることなら海外プログラムに参加したいと考えるようになった。入学時の TOEIC スコア 500 を達成し、国際協力センターが提供する英語プログラムで学べることになった。もちろん学部の英語も懸命に学習し、10 月には IELTS スコア 5.0 を達成した。大学入学後、これほど英語の学習に本腰を入れられたのは、海外への意識が高い同じ所属学科の学生に触発されたということもある。

（２）参加した海外プログラム

まずは一度海外に行ってみようと異文化体験を目的に、1 年次秋学期に 6 週間オーストラリアに赴く「カーティンプログラム」に参加することにした。現地での英語コミュニケーションもそうだが、日本のように 24 時間開いているコンビニのような店舗がなく、食べ物や生活のリズムも日本とは異なる、こうした異文化の環境をまずは体験してみたかった。

現地では、カーティン大学の英語学習プログラムに 6 週間参加して英語力を高め、またホームステイを通して異文化交流を深めた。カーティン大学での学習は、実用的な英語力の習得を目的に 6 週間、昼休みの 2 時間を挟んで終日英語を学習するという内容であった。自分のクラスには中国からの参加者が多かったが、中東出身の参加者もいた。全て英語で進行される授業では、特に最初のうちは英語を聞き取りづらく苦労した。授業ではグループワークをするなど他の参加学生とのコミュニケーションの場面も多く設けられていた。

木曜日については 14 時で終了することもあり、そのような時や放課後には、クラスメイトで市街地に買い物に出かけたり、バスケットボールを楽しんだり、キングスパークという有名な公園を観光したりした。土日はホストファミリーがピクニックに連れて行ってくれたりし、彼らとの交流を深めた。

プログラムの終盤に、スポーツや歴史などから好きなテーマを選んで、そのテーマについて調査をするという課題が与えられた。自分はオーストラリアにおける先住民の存在について調査することにし、カーティン大学の教員やホームステイ先の家族にインタビューをした。このテーマを選んだのは、現地で滞在中に街中で先住民の人に嫌な思いをさせられた自分の経験や、ホストファミリーが何となく先住民の人々から距離を置いているように見受けられたことなどから、社会問題として関心を持ったからである。

（３）事前・事後学習について

事前学習については、3 人 1 グループになってオーストラリアの各州の概要について調べてそれを発表した。自分が所属するグループは、南オーストラリア州の概要、歴史、文化などについて調べ、授業で 10 分間発表した。実際に行ったのは西オーストラリア州のパース市であったが、予めオーストラリアという国の素晴らしい点や抱えている問題などを知ることができて良かった。

事後学習については、事前学習の時と同じグループで、現地でインタビューしたことをまとめて英語で 10 分間の発表をした。この資料を作るために、英語の教員やホストファミリーなどにインタビューをし、現地の人々の考えを知ることができたのは良かった。

（４）成長を感じる点

授業の最初の頃は聞き取れなかったネイティブの話す英語が少しずつ聞き取れるようになり、語学力が向上したと感じている。

現地での異文化体験を通して、自分なりに異文化対応力がついたように感じる。事前学習と現地での体験を通して現地の人々にとってタブーなことを理解できたり、現地の環境に合わせて失礼のないよう配慮したおかげで、自分勝手なところが治ったりしたように思う。

（５）満足・不満足な点

満足している点は、ホストファミリーと交流でき、異文化理解を深めることができたことである。

不満足な点は、仕方がないとはわかってはいるものの現地の授業のクラスには日本人と中国人が多かったことである。もう少し出身国が多様な学生で構成されることを期待していた。また、カーティンプログラムは他の海外プログラムとは内容が異なるので、事前学習冒頭の合同説明会では説明の内容が関連しないものが多く、自分たちのプログラムについてもう少し詳細に説明して欲しかった。

（６）今後の学修

カーティンプログラムから帰国後、もっと海外で学びたいと考えるようになり、また日本での学修だけでは物足りないと感じるようになった。そこで、就職活動のことも考え 2 年次のうちにより長期の海外プログラムや留学にチャレンジすることにした。

そして 2020 年 2 月からカナダに半年間の協定校語学留学に行くことが決まった。カナダに留学する理由は、将来必須とされるであろう英語をもっと身につけたいので、それには現地で生活するのが最も良いと考えたからである。

就職については、英語力が武器になるような仕事、食料関係の仕事などを考えている。

２．東洋大学学生２（国際学部国際地域学科２年）

（１）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

中学校 3 年生の時、学校で開催している海外プログラムに参加した。自由参加で 20 人程の生徒が 2 週間、オーストラリアでそれぞれホームステイをしながら、現地の大学で英語のプログラムを受講するという内容であった。それ以外の国内での異文化体験は、通っていた高校に 1 日だけ留学生が来て、少し会話をしたという程度であった。

大学受験時には、経済・商学部系統を志望しており、留学意欲も特になかったが、入学することになった東洋大学国際学部国際地域学科では、本プログラムの履修が必須となっていたため、参加を覚悟した。

（２）参加した海外プログラム

中学 3 年生の時に参加した海外プログラムでは、英語の総合的な能力が低く、ホストファミリーと上手にコミュニケーションをとることができずにプログラムが終わってしまった。それが悔しかったため、自分なりのリベンジということでオーストラリアでのホームステイが組み込まれたプログラムを選んだ。

オーストラリア・パースにあるカーティン大学での 6 週間のコースに参加した。宿泊の形態はホームステイで、現地のホストファミリーにお世話になった。

カーティン大学では正規学生向けの専門の授業ではなく、Curtin English という、留学生向けに英語スキルを上げるためのコースを受講した。そのため、現地学生との交流より留学生同士での交流がほとんどであった。専門分野の知見を得ることはできないが、英語の能力を上げるという意味では良いコースだと思う。一日に約 5 時間、週 5 日授業があった。

日によって授業数が異なるため、早めに授業が終わった日は郊外に出てショッピングなどを楽しむこともできた。休日は大学側が設定したプログラムに自主的に参加することができた。日本人同士でのんびり過ごす学生も多くいたが、せっかく異文化体験ができるチャンスなので、積極的に参加した。プログラムがない日は、前もって友人と行きたいところを相談し、いろいろな場所を観光した。

（３）事前・事後学習について

事前学習は、①複数あるプログラムからカーティンコースを志望した理由についてのレポートを提出すること、②オーストラリアにまつわる 4 つの映画から 2 つを選択して鑑賞し、その映画評を提出すること、③3～4 人 1 組のグループでオーストラリアの州について調査し発表すること、であった。②については、映画を観ることで実際にその国の文化や価値観を学ぶことができたので役に立ったと感じている。また、③については、自分たちのグループは西オーストラリア州を担当し、調査・発表した。上記に加えて、現地での行動についての目標を立てた。自分は「現地の人とのコミュニケーションを積極的にとる」ことを目標にし、海外プログラム参加中は常に意識して行動した。

事後学習はグループで、オーストラリアの生活について掘り下げて調査し発表する、というものであった。自分たちのグループは、オーストラリアのスポーツについて発表を行った。テーマ決めは帰国後であり、日程的に短期間での調査になってしまったため、発表はかなり薄い内容になってしまったが、オーストラリアのスポーツについて理解を深めることはできたと思う。

（４）成長を感じる点

語学力の上達を期待して参加したプログラムであったが、参加後は、異文化対応力、語学力、リーダーシップやコミュニケーション力、課題解決力、自己管理能力などが向上したと感じた。本プログラムとカリキュラムのつながりについては、海外プログラムで訪れた国は先進国であったが、学部で中心的に扱うのが途上国の課題であるため、直接的には結びついていないと感じた。

（５）満足・不満足な点

満足した点：滞在先での外国語の授業、パースという都市、学外活動が充実していたこと。

海外プログラム参加の目的であった語学力の向上が図れたという実感があったため。また、大学が提供してくれる学外の活動が多く設定されており、積極的に参加することで異文化体験がたくさんできたことがよかった。
満足できなかった点：ホームステイ先
母娘のシングルマザーの家庭で、自分のほかにも入れ代わり立ち代わり留学生がホームステイしていたが、ホストファミリーはほぼ放任で、ただ宿泊先を提供してくれるのみであった。食事も各々がキッチンを借りて自分たちで作ることがほとんどで、中学生の時のホームステイと比べて、異文化での家庭生活の体験があまりできなかったことが残念だった。

（６）今後の学修

次の海外プログラムへの参加は考えていない。現在、部活動に所属しており、留学と部活動を天秤にかけたときに、部活動を優先したいと考えたため。

３．東洋大学学生３（国際学部国際地域学科２年）

（１）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

大学進学をする時から、海外留学をすることを決めていた。高校時代は修学旅行でハワイに渡航した以外には異文化体験も含めて特別な経験はなかった。ただ、学校で TOEIC Bridge Test は受験した。

英語は好きな教科だったため受験勉強でもかなり力を入れて取り組んだが、留学を考えるのであれば、高校時代にしっかりと英語の学習をして英語の基礎を作っておく事が大切だと今になって思う。大学受験は、国際系の学部を目指していくつかの大学を受験したが、入学後の留学制度などはあまり詳しくは調べていなかったため、「海外英語実習」が必修科目という事は入学後のオリエンテーションで聞いて初めて知った。想定外だったが、入学してすぐに留学できるのはとても良い制度だと思った。

（２）参加した海外プログラム

１年次の必修科目である「海外英語実習」に参加した。英語のスコアが良かったため、複数ある留学先から、オーストラリアのカーティン大学を選んだ。留学中はカーティン大学の英語学校で１ヶ月半、英語の勉強をした。そこはカーティン大学の次のコースに進学するための英語のクラスで、自分のクラスは中国、パキスタン、インドネシア、サウジアラビア、オマーン、モンゴルなど多様な国から来た学生で構成されていた。他のクラスでは、中国など特定の国からの留学生で占められるようなクラスもあった。１クラスは約２０名で、そのうち東洋大の学生は４名だった。

平日はひたすら英語を勉強して、土日はパースの街の見学、動物園見学などカーティン大学が用意したアクティビティにクラスの友人と参加する事もあった。

クラスの学生は、英語の授業を受講した最後に試験を受ける必要があるので、皆熱心に勉強していた。東洋大学の学生は次のコースへ進む事はないが、試験はクラスメートと一緒に受験した。試験結果は各自にフィードバックされたが、自分が試験を受ける前に想定していたよりも成績は良くなかった。

（３）事前・事後学習について

事前学習は、役に立たなかったと思う。班に分かれてオーストラリアの各州について調べ、班毎に発表する内容だったが、自分達が行くパースのある西オーストラリア州だけでなく、それ以外の州を調べる班もあり、オーストラリア全体の事を学習する内容だった。そのため、それぞれの地域について得られた知識は、自然と浅くなり、実際に行くパースの知識も浅くなってしまった。オーストラリア全体の事を浅く広く知るには良いが、自分たちが留学する西オーストラリア州やパースに特化しなければ、あまり意味がないと思う。西オーストラリア州やパースに特化して、地域の持つ課題や地理的な事、気候などの予備知識が得られるような事前学習の方が有益だと思う。

それに対して、事後学習は文化面や環境面などで学びが深まるものだった。事前学習と同様に班に分かれて、自分たちがパースで体験した事を英語で発表するのだが、改めて留学した国や地域の事を振り返って見直す事ができた。また、他の人の視点を知る事などで、自分なりの気づきもあった。特に文化面ではオーストラリア・デー（オーストラリア建国記念日）が先住民アボリジニにとっては全く逆の意味を持つ事やイスラム圏から来ていたクラスメートとの生活習慣の違いについて、改めて考える機会となった。

（４）成長を感じる点

「海外英語実習」は必修科目なので、当然、カリキュラムとの結び付きは強いが、英語の上達を目指す上で、また、海外に興味を向けるという意味でも効果が大きいと思う。帰国後は、聞き取れる英語の量が渡航前とは全然違ってかなり増えたと実感している。また、特に対策をした訳ではないが IELTS のスコアが 0.5 ポイント伸びた。

（５）満足・不満足な点

不満足な事は何一つない。「海外英語実習」に参加して良かった。英語能力の上達に繋がり、普段は話をすることのない国の人達と英語を使って会話をする事ができ、お互いの国について語り合い、それによってそれぞれの国の事情を知る事ができた。また、アラブ系の癖の強い発音の英語は聞き取りづらかったが良い経験になった。

英語の勉強とは直接関係はないが、パースは気候が良く、温暖で過ごしやすかったことも良かった。暖かい県の出身のため、東京の冬を経験しなくて済んだ。

（６）今後の学修

大学入学当初から、日本以外でも生活をしてみたいと思っていたため、１年間の留学は絶対に経験したいと考えていた。そのため、３年生の夏に出発する交換留学プログラムで、約１年間の留学をする予定だ。本当はまたオーストラリア・パースに行きたいと思っているが、パースに行くプログラムがないため、アメリカのミズーリ州への留学を希望している。今は学内選考のプレゼンテーションをしっかり成功させたいと考えている。

４．東洋大学学生４（国際学部国際地域学科２年）

（１）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

大学入学前に海外体験はなく、異文化体験としても ALT に接したくらいだった。ただ、高校から英語が好きで得意科目だったため、将来は英語を使う仕事がしたいと考え、海外留学必須の大学・学部として東洋大学国際学部を選んだ。ゆえに、海外留学には必ず参加しようと考えていた。

（２）参加した海外プログラム

本プログラムへの参加にあたり、目標は IELTS6.0、ノルマとして 5.5 以上を自分で設定した。結果として 5.5 を達成できた。

派遣期間 6 週間の具体的内容は、1 クラス 20 名ほどの 4 つのクラスに分けられ、週替わりで月曜～金曜まで午前 2 コマ、午後 2 コマの英語授業を受講する。東洋大生以外はアジアからの学生が多かった。1 週目は午前がスピーキング、午後がリスニング、2 週目は午前がライティング、午後がリーディングというように設計されていた。また、PBL に関しては東洋大生 3 人グループで、授業とは関係なくオーストラリアのスポーツと生活・経済について調べることにしており、3 週間目に東洋大学の先生と面談があり、どこまで準備が進んでいるかを問われた。しかしパースという土地に滞在しながらオーストラリア全土をこのテーマで調べるのが難しく、オーストラリアの産業に関するテーマに変更した。グループで空き時間に集まり、またホームステイ先の家族にヒアリング等をして調べた。プレゼンは現地では行わず、帰国してからネットで調べたりして東洋大学でプレゼンを行った。

アジアから来ているクラスメイトとは積極的に交流したが、カーティン大学の学生との交流については、大学が夏休みで学生がいないため、できなかった。

（３）事前・事後学習について

事前学習としては、オーストラリア各州のことを分担して調べて発表した。ただ、自分たちはパースに行くのに、関係ない地域のことを調べてどういう意味があるのか、よくわからなかった。PBL については事前準備は何も行わなかった。こうした点はオーストラリアでの PBL にもつながっていないと感じた。今回のことが次年度のプログラムに活かされてい

ると聞いて、その点は良かったと思うが、自分たちの時にもっと考えておいてほしかった。また事前に、カーティン大学から東洋大学に来ている 8 人の留学生と交流した。

事後学習としては IELTS の受験以外に、PBL のテーマに沿ったプレゼンテーションを行った。帰国して 3 日間ほどでネット等で調べながらパワーポイントの資料を作成し、精度を高めてもう一度作り直した。

（４）成長を感じる点

アジアからの留学生とカーティン大学で一緒に学んでいる時に、自分の方が圧倒的に文法やリーディングはできるが、彼らの方がコミュニケーション力が高いと感じた。このプログラムを通じて、コミュニケーション力を高めたいと積極的にアジアからのクラスメイトともかかわり、英語でのコミュニケーションにおいて臆することがなくなった。また、以前は英語ができれば世界で通用すると考えていたが、プラスアルファがなければ通用しないと考えるようになった。

（５）満足・不満足な点

実際に IELTS のスコアを上げることができ、また海外での人や生活に臆することがなくなったことに満足している。アジアからのクラスメイトともっと交流したかったが、ホームステイのしがらみや規則でできなかったことが満足できなかった点である。

（６）今後の学修

一緒にこのプログラムに参加した東洋大生が、プログラム終了後に長期留学に行くということを知り、自分も行きたいと思った。それでオランダへの 1 年間の留学プログラムに申し込んだ。元々、長期留学がしたかったので、このプログラムはそのための良いステップとなったと思う。また、英語だけではダメで他に強みを身につける必要があると考え、プログラミングに取り組んでいる。オランダへの留学でもプログラミングを学ぶことにしている。